

福岡城肥前堀第4次調査報告



1992

福岡市教育委員会

序

福岡城は国指定史跡として保護され、市民の憩いの場と親しまれています。福岡城は黒田長政公によって築かれた五十二万石の居城ですが、かつては城の内堀から那珂川にかけて肥前堀と呼ばれる堀がありました。しかし、この堀は明治年末から昭和初期にかけての都市開発のため、埋め立てられました。この埋め立ては福岡市の都市形成に大きな意義がありましたが、貴重な文化財が埋め立てられたのは残念と言わざるを得ません。

本書は市庁舎地下駐車場建設に伴って行われた肥前堀第4次の調査報告書です。

この報告書が市民の方々の文化財の理解と認識の一助となり、文献のみで知られていた肥前堀を考えるうえでの資料となれば幸いです。

最後に調査に当たってご配慮いただいた関係各位ならび諸先生方に厚くお礼申し上げます。

平成4年1月13日

福岡市教育委員会

教育長 井口雄哉

例 言

1. 本書は福岡市庁舎地下駐車場建設に伴って、福岡市教育委員会が1989年（平成元）度に実施した福岡城肥前堀第4次調査報告である。
2. 本書に掲載した遺構、遺物の実測・製図は菅波正人、林田憲三があたった。
3. 遺構、遺物の写真撮影は菅波が行った。
4. 本報告書の作成に関しては井手未知、佐々木涼子、藤信子、山崎香織の協力を得た。
5. 本報告に係わる遺物、図面は福岡市埋蔵文化財センターに保管される予定である。
6. 英文要約は林田が行った。それ以外の本書の執筆、編集は菅波が行った。
7. 卷末の図面は福岡城の町並みの復元図である。図面作成は柳沢一男氏（宮崎大学教育学部助教授）による。

目 次

1. 調査に至る経緯	1
2. 発掘調査の組織と構成	1
3. 位置と環境	2
4. 福岡城肥前堀の既往の調査	4
5. 調査の記録	5
6. まとめ	14

1. 調査に至る経緯

現在の福岡市庁舎の位置する場所には、かつて、福岡城の堀である肥前堀が存在した。肥前堀は福岡城から那珂川に向かって延びる堀であったが、1910年（明治43年）に開催された第13回九州沖縄8県連合共進会に先立って埋め立てられた。

平成元年度、市庁舎の地下駐車場、及び、天神地下街との連絡通路の建設工事が実施されることとなった。埋蔵文化財課ではこの工事に先立って、埋蔵文化財の事前の調査が必要であると判断し、開発部局である建築局と協議を待った。協議の結果、調査は外壁工事を行っている間の10日間程度で行うこととなった。調査にあたって、肥前堀の中の発掘は海拔0m以下のために、相当量の湧水が予想された。しかし、調査のための水止めのシートパイルは設置出来ないことや湧水の処理が行えないことなどから、調査は堀の北側の岸の確認を主目的とした。調査には当時、博多区店屋町で留学生会館建設に伴う発掘調査を行っていた浜石、菅波が担当することとなり、菅波がこれにあたった。

調査は1989年10月11日に開始し、同年10月21日に終了した。

遺跡調査番号	8950	遺跡番号	HZB-4	所在地	中央区天神1-8-1
分布地図番号	天神49 E-1	開発面積	700m ²	調査面積	180m ²
調査期間	1989年10月11日～10月21日				

2. 発掘調査の組織と構成

調査委託 福岡市役所財政局

調査主体 福岡市教育委員会 教育長 佐藤善郎（前任） 井口雄哉

埋蔵文化財課長 柳田純孝（前任） 折尾学

埋蔵文化財第一係長 飛高憲男

調査庶務 埋蔵文化財第一係 松延好文（前任） 寺崎幸男

調査担当 埋蔵文化財第一係 菅波正人（現第二係）

調査作業 内田丈 大橋善平 仲野正徳 塚副義一郎

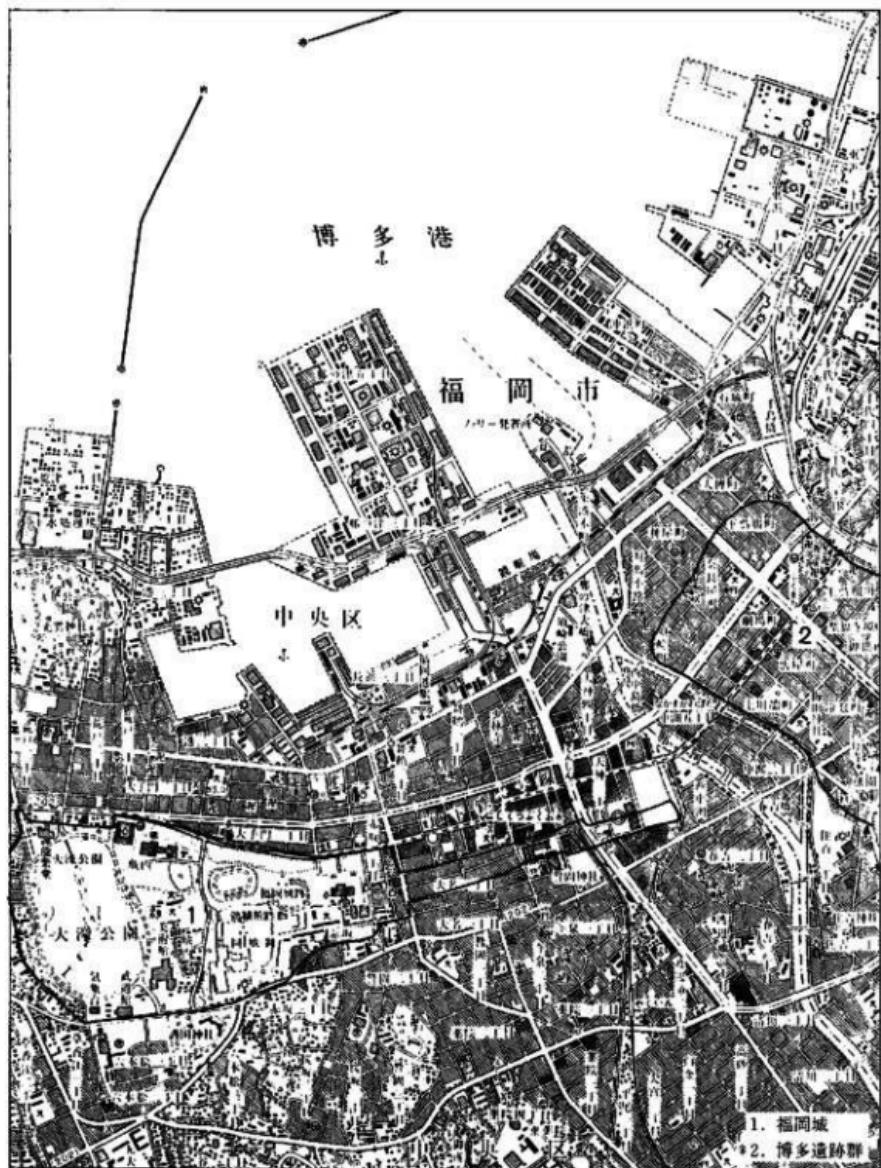
整理補助 林田憲三（西南学院大学講師）

3. 位置と環境

福岡城は慶長6年（1601）、黒田長政によって築かれた居城で、現在、国指定史跡でもある。黒田長政は関が原の戦いでの功績により、筑前国五十二万石を授かる。当初、小早川氏の居城であった名島城に入城した。名島城は三方を海に囲まれた堅固な城であったが、戦乱の終結とともに世情に合わなくなつたことと城下町として手狭だったことから、城は警固村福崎（現在の福岡市中央区区内）に移された。この場所は博多湾岸にある島嶼状独立丘陵の一つで、平尾付近から北に延びる丘陵の先端部にあたる。この丘陵の基盤地質は新生代第三紀の早良層群浦谷層に対比される。福岡城築城以前の丘陵の西側は海が湾入する入江が、東側は那珂川の沖積作用による陸地が存在していた。

今回報告する肥前堀は三の丸東丸の端から東に延びて那珂川に通じる堀である。この堀は南側からの進攻に備えて造られたもので、幅30~35間（約54~63m）の水堀である。この堀には3カ所の門があり、東から数馬門、薬院門、赤坂門と呼ばれた。そのうち肥前堀と呼ばれるのは薬院門から東の部分で、現在の大名小学校から那珂川までの間を指す。肥前堀の名称の由来は肥前の鍋島加賀守によって加勢工事されたところから来ており、このほか、文書、絵図には佐賀堀と記されるものもある。肥前堀は江戸時代を通じてその役割を果たしたが、明治43年（1910）の第13回九州沖縄8県連合共進会に先立って埋め立てられた。

次に周辺の遺跡について見ていくと、福岡城のある丘陵は古代の对外交渉の拠点であった太宰府鴻臚館が設置された所でもある。1987年12月にはじまる鴻臚館跡の調査は現在も進行中であるが、筑紫館に隣接する布堀りの掘立柱建物や鴻臚館の推定南門跡の基壇、多量の中国陶磁器やイスラム陶器等、重要な遺構、遺物が検出されている。肥前堀のある天神地区は那珂川によって形成された沖積地であるが、明確な遺跡の発見はない。ただ、大神3丁目のビル工事で碇石が、西鉄福岡駅工事では中国製陶磁器が発見されている。今回の調査でも弥生土器、上師器等が検出されており、砂丘の形成時期を含めて検討が必要である。那珂川の東岸には博多遺跡群がある。博多遺跡群は弥生時代に始まり、古代、中世を通じて貿易、政治の拠点であり、数々の重要な遺構、遺物が検出されている。古墳時代では5世紀初頭に全長56m以上の前方後円墳（博多1号墳）が造られる。古代では石器、銅製金具、墨書き器、皇朝十二錢、円面鏡、鴻臚館式瓦等が出土しており、官衛施設の存在が推定できる。博多に「鴻臚中島館」が存在したとする説もある。平安時代後期には博多は鴻臚館に代わって貿易の中心になり、調査ではこの時期の輸入陶磁器類が多量に出土する。鎌倉時代には文永、弘安の2度の元寇によって、戦火を破る。しかしその後、鎮西探題が置かれ、博多は貿易に加え、政治の中心にもなる。



4. 福岡城肥前堀の既往の調査

福岡城肥前堀の調査は、1984年福岡県教育委員会によって、第1次調査が行われて以来、これまで4次の調査が行われた。ここではそれらの調査成果を概述する。

第1次調査（調査期間：1984.06.01～06.12、調査面積：580m²）

県庁移転に伴って、福岡県教育委員会によって行われた調査である。この調査では数馬門に伴う石垣等が検出された。

第2次調査（調査期間：1984.07～08、調査面積：150m²）

福岡市庁舎建設に伴って行われた調査で、肥前堀の北岸と護岸の杭列が2列検出された。この調査では北岸の構造は基盤の砂層を二段に削り出し、杭を打ち込み護岸したものであることが判明した。また、石垣等は検出されず、江戸時代の古図と一致するものであった。遺物は江戸時代の肥前陶磁器、瓦の他、明治時代のインク瓶、鉛筆等も出土した。

第3次調査（調査期間：1988.11.07～11.26、調査面積：650m²）

福岡市公用金庫建設に伴って行われた調査で、第2次調査で検出された北岸の2段目のテラス部と護岸の杭列が検出された。この調査では北岸の肩は確認することはできなかったが、堀の底を確認することができた。堀の底は地表から約4mに及ぶ。また、テラス部分は崩落と数回にわたる整地により、幅を拡張していることが判明した。

第4次調査（調査期間：1989.10.11～10.18、調査面積：150m²）

福岡市庁舎地下駐車場建設に伴って行われた調査で、肥前堀の北岸と護岸の杭列が1列検出した。この杭列は第2次調査で検出された岸寄りの杭列に連なるものである。

調査報告書一覧

1. 折尾学・山崎純男「福岡城肥前堀」『福岡市埋蔵文化財調査報告書第131集』福岡市教育委員会 1986
2. 柳沢・男爵「福岡城肥前堀第3次報告」『福岡市埋蔵文化財調査報告書第293集』福岡市教育委員会 1992
3. 本報告



Fig.2 福岡城肥前堀調査地点位置図 (1/4,000)

5. 調査の記録

1) 肥前堀

調査経過 今回の調査地点は第2次調査地点と第3次調査地点との間に位置する。調査区の位置は市庁舎建設の際に行われた第2次調査の成果に基づき、堀の北岸の部分に幅9m、長さ20mのトレッセを設定した。

重機で厚さ30cmのアスファルト、造成土を除去すると、基盤層（砂層）に掘りこまれた堀の岸を検出した。そこから更に掘り下げ、明治42年に埋め立てられた赤橙色の粘土層まで重機で除去し、それ以下は人力によって掘り下げた。

層位 堀が掘りこまれている基盤層は堆積性の砂層である。堀の埋土は大きく赤橙色粘土（明治43年の埋め立ての土）と埋め立て以前の堀の埋土に分けられる。堀の埋土は二段に掘りこまれたテラス上に厚さ約20~30cm堆積していた。埋土は堀の肩が崩れて流れ込んだ暗灰色粗砂で黒色の粘質土が混ざる。遺物はほとんど後者から出土した。

構造 第2次調査では堀は二段に掘りこまれ、護岸のための杭列が確認されている。今回検出した北岸は約60°の傾斜を測る。検出面から深さ1m下にテラス部分がある。テラスの中央では護岸のための杭列を確認した。杭列は北岸の下端から約1mの水平面に、約50cm間隔で打

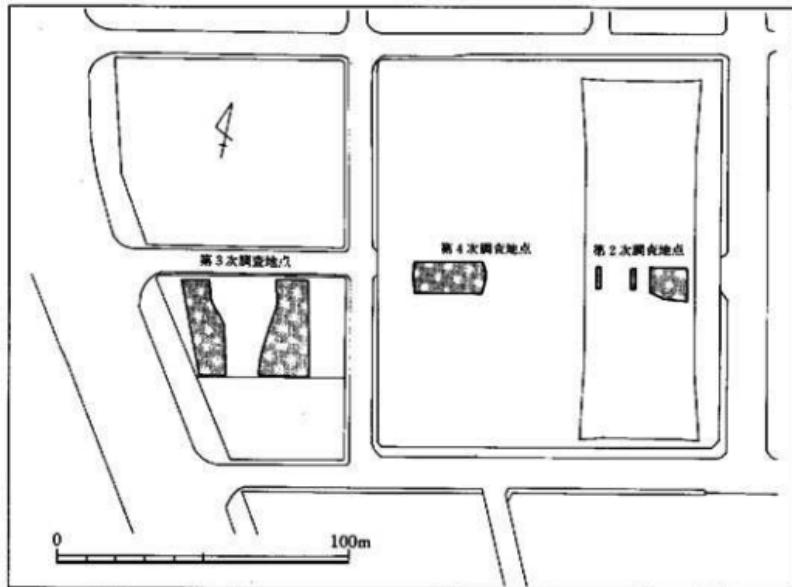


Fig.3 福岡城肥前堀第2～4次調査地点周辺測量図 (1/2,000)

ち込まれている。杭の太さは約5cmを計る。杭は検出面から約80cmの深さまで打ち込まれている。この杭列は第2次調査で検出された岸寄りの杭列に連なると考えられる。杭列から掘の内側にかけて緩やかに傾斜していくが、テラスの南側は擾乱のため、削られている。テラスの幅約2m、残存する最深部で約0mを計る。



Fig.4 調査地点全景（東から、奥の工事中の場所が第3次調査地点）

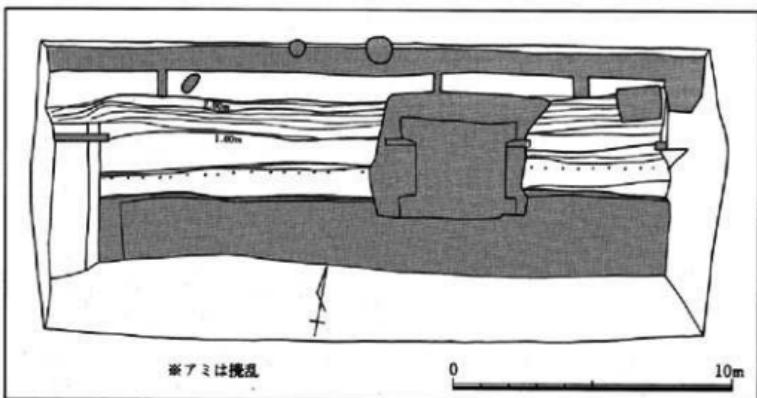


Fig.5 通構全体図 (1/200)



Fig.6 調査区全景 (南から)



Fig.7 調査地区全景（東から）

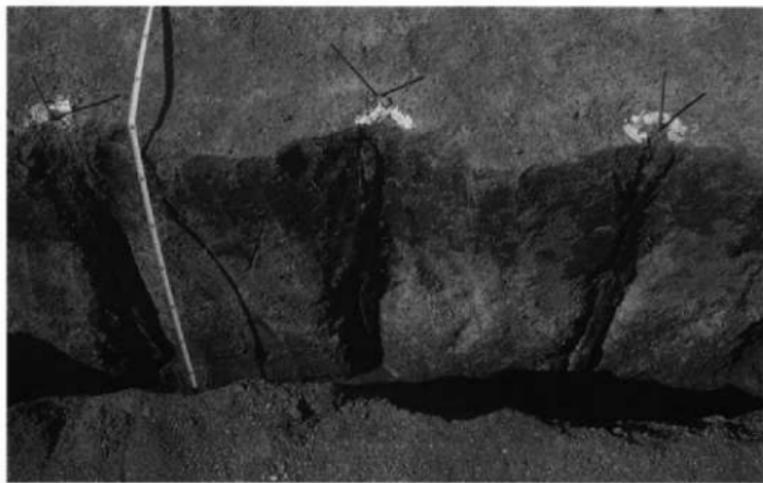


Fig.8 桁立ち割り（南から）

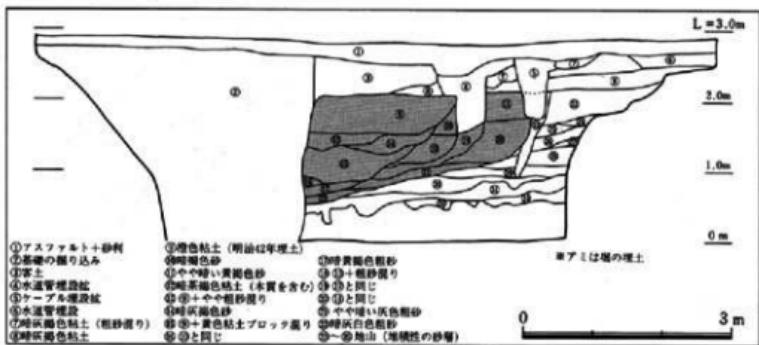


Fig.9 調査区西壁土層実測図 (1/80)



Fig.10 調査地区西壁土層 (東から)



Fig.11 調査地区西壁土層 (東から)

2) 出土遺物

遺物はほとんどテラス上に堆積した暗灰色粗砂から出土した。遺物は堀ができた以後の肥前系陶磁器、備前焼、灯明皿として使用した土師器小皿、瓦等がある。このほかに、少量ではあるが、弥生土器、土師器、須恵器、中国製陶磁器等、福岡城築城以前の遺物もある。

弥生土器（1、2）

1は二重口縁壺の口縁で、くの字状に折れて外面には棱がつく。外面には粗いハケメが残る。後期中頃～後半に位置づけられる。2は壺の底部で、上底を呈する。中期前半に位置づけられる。いずれも器面の風化が著しい。

古式土師器（3）

3は山陰系の二重口縁壺の口縁である。口縁は直線的に立ち上がり、屈折部分はヨコナデによってわずかにくぼむ。器面の風化が著しい。古墳時代初頭に位置づけられる。

中世の遺物（4、26）

4は在地産の瓦器碗である。底部には断面三角形の低い高台がつく。底部には糸切りの痕跡が見られる。26は白磁の合子である。体部は蓮弁状に型押しされ、受けの外面には雷文が施される。内面と外底部は露胎である。釉色はやや青みがかった白色を呈する。これら以外では茶褐色四耳壺や白磁皿が出土している。

近世の遺物（5～25、27～31）

5～23は土師器皿、14は施釉陶器皿である。いずれも口縁に煤が付着しており、灯明皿として使用されている。土師器皿は23以外は底部の切離しは糸切りである。器高0.9～1.3cm、口径6.2～7.6cmを測る。23は底部の調整は回転ヘラケズリで、器高1.7cm、口径11.3cmを測る。14は外面にオリーブ色を呈する釉がかかる。器高1.7cm、口径6.1cmを測る。24、25は土師器の高环の脚部である。27～29は焼塙壺で、27、28は底部に孔があり、内面には布目がつく。27は外面に文字がスタンプされているが、判読できない。29は孔のないもので、内底面には布目がつく。30は蓋で、内面に布目がつく。31は陶器のすり鉢である。

これらの他の遺物には肥前系陶磁器（壺、盤、碗、蓋、人形）、高取焼、備前焼すり鉢、瓦などが出土した。



Fig.12 出土遺物

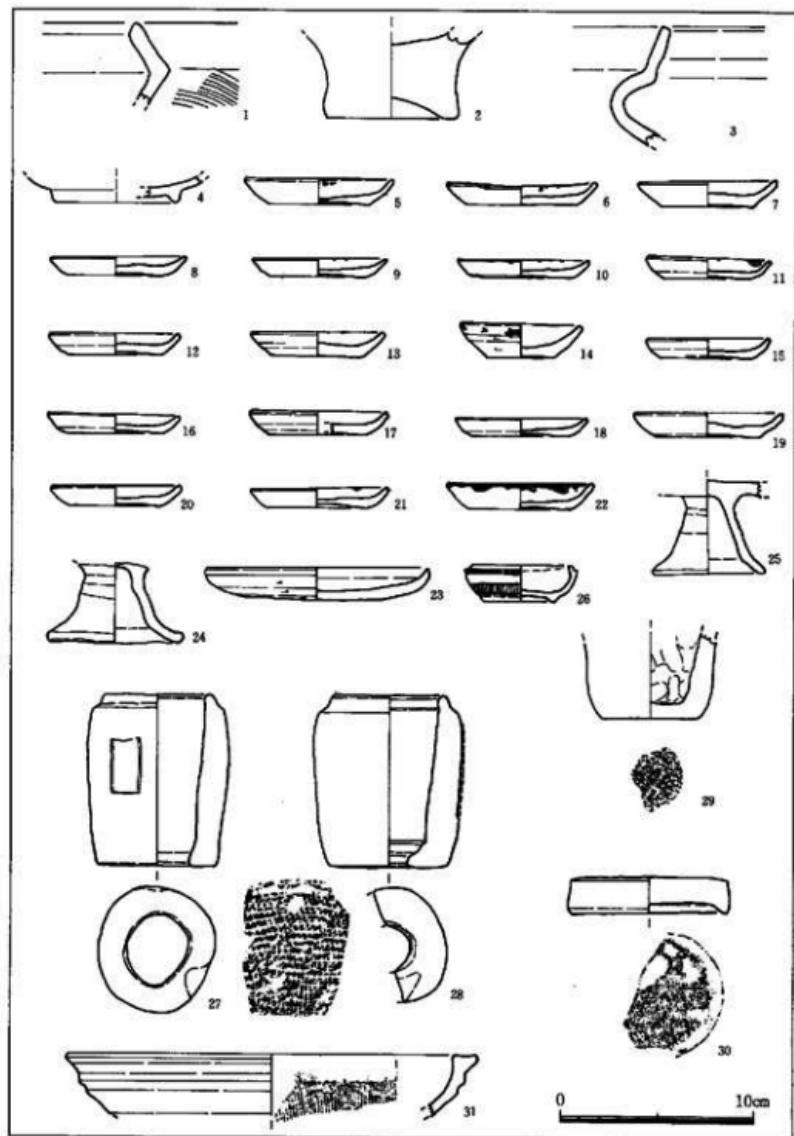


Fig.13 出土遺物実測図 (1/3)



Fig.14 出土遗物

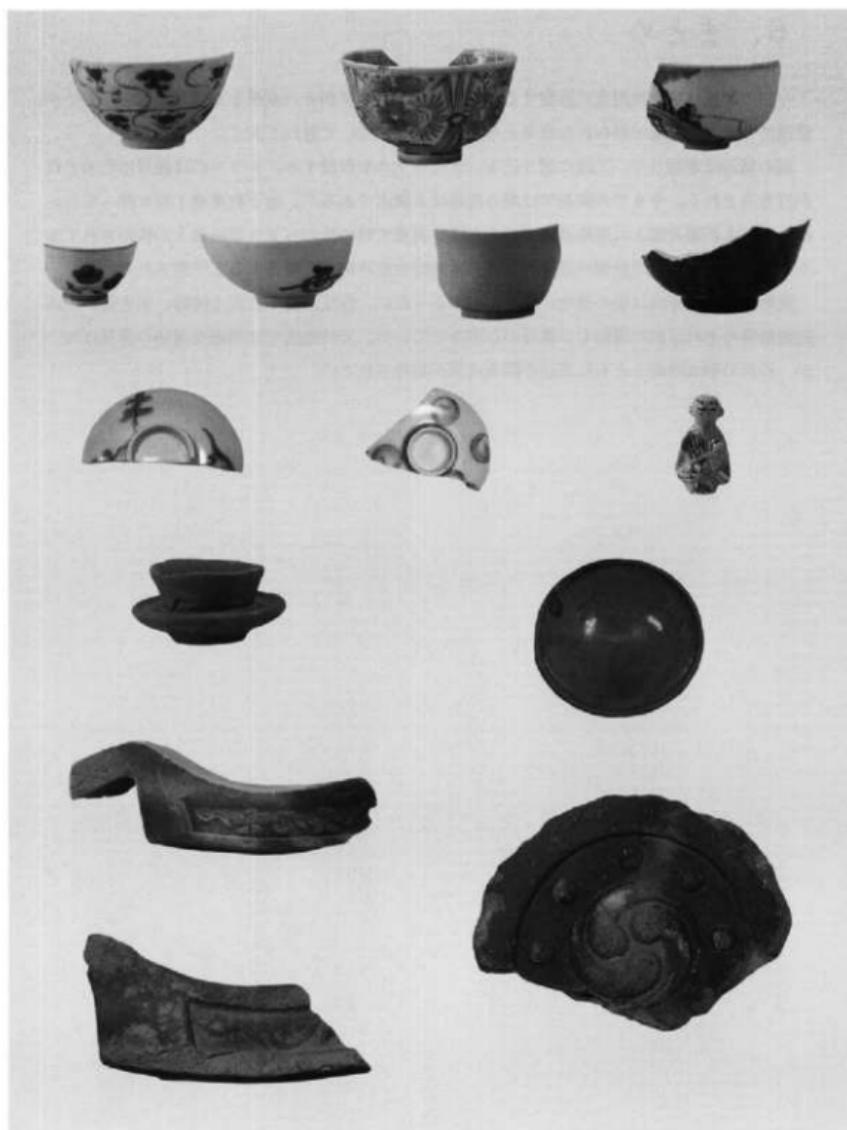


Fig.15 出土遺物

6. まとめ

今回の調査は第2次調査に近接する部分であり、第2次調査の成果を追認したことが多いが、最後に今までの調査で得られた成果と今後の問題点について触れておく。

堀の構造は素掘りで、二段に掘り込み、下にテラスを形成する。テラスには護岸のための杭が打ち込まれる。今までの調査では堀の南岸は未検出であるが、地下駐車場工事に伴って行われた西日本新聞会館との連絡道路での立ち会い調査で堀の底のヘドロ状の埋土が検出されており、堀の南岸は市役所南側の道路から西日本新聞会館建物下に存在すると予想される。

遺物は福岡城築城以後の遺物がほとんどであったが、弥生土器や古式土師器、須恵器、中国陶磁器等のそれ以前の遺物も少量ながら出土している。天神地区では明確な遺跡の発見はないが、砂丘の形成時期とともに周辺の調査成果が期待される。

Summary

The Hizen Bori (moat) is located in Chuo-ku, Fukuoka city and the eastern half of the moat connecting between the east end of the interior moat of the Fukuoka castle and the Naka River as the eastern boundary of downtown. It is not clear when the Hizen Bori was constructed, but it was more likely constructed in the early Edo period (early 1600 A.D.), and the moat was destroyed with earth during 1907-8.

The 4th archaeological campaign was carried out at the site where is 200m from the east end of the Hizen Bori; the excavation site is limited to the area between the northern counterscarp and the inner area of the moat. Comparing with the whole area of the moat, the surveyed area is very limited.

The excavation survey was carried out on October 1988, and the area of nearly 180 m² was excavated. The uncovered remains are the northern edge of the moat, a terrace founded the counterscarp and a row of wooden spikes to strengthen the surface of the counterscarp.

The moat itself has only a terrace but does not have any additional architectural features. The terrace is 2-2.4m deep.

A row of wooden spikes is placed along the terrace to make stronger the surface of the counterscarp.

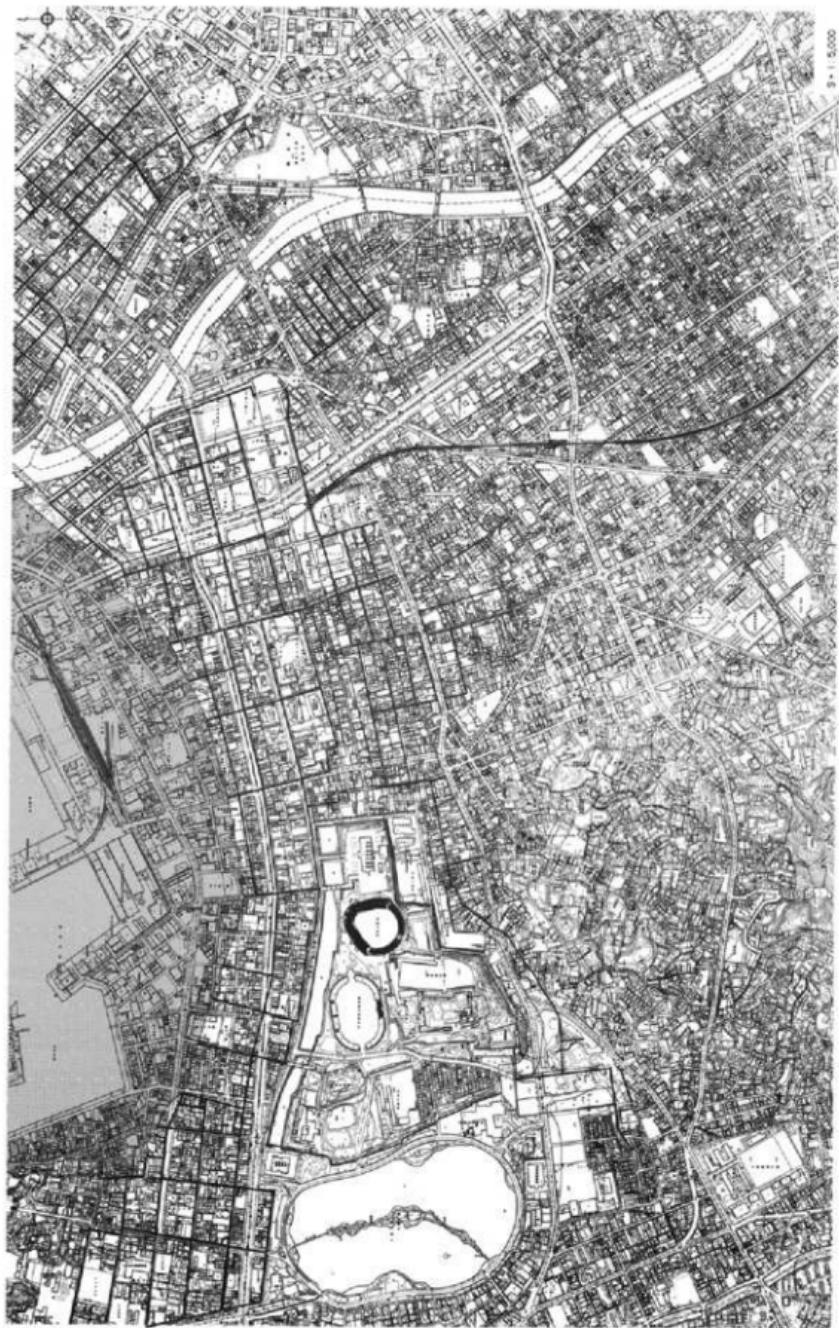
Artifacts found in the strata are pottery, ceramics, and stone instruments, dated from the Yayoi period to modern times. We can therefore imagine the daily life of people who lived in this town.

福岡市埋蔵文化財調査報告書第294集
福岡城肥前堀第4次調査報告

1992年3月13日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目7-23

印刷 福博総合印刷株式会社
福岡市博多区堅粕3丁目16番36号



5 - 1:50,000